絵　本
テキスト創作塾
通信　No.3

推敲の一方法

第１回「独創性」その４

田島征三の作品にはびっくりした。

「やまからにげてきた・ゴミをぽいぽい」1993 年刊の内容は、ごみ問題だ。

左から読むと「やまからにげてきた」、右から読むと「ゴミをぽいぽい」のストーリーが描かれている。

絵の独創性だけではなく、採りあげる題材に思想や哲学が感じられる。

つまり自分らしさを絵本の題材でも表現しているということだ。

「つかまえた」の内容は、帯の「少年時代のあざやかな体験」とあるから昭和のできごとだと分かる。

昭和生まれのぼくらも同じ体験をしているので、読んだら直ぐに昭和を感じた。これを手に取ってみて、声高に昭和はこうだった、などと言う必要がないことも分かる。

新井良二作の絵本は、今も同じタッチの絵である。

1997 年刊の「そのつもり」をみると、動物がみな同じ大きさ描かれていたり、胴体の長い牛がでてくる。

「そのつ森」になって考えるすばらしさを教えてくれる。

「水の絵本」は、たいせつなものを考える本だ。雄大な自然がいい、溶け込むような景色がいい。荒井ワールドの世界が満載。

「みどりいろのほし」2020 年刊

長谷川義史ワールド満載であり、デフォルメの良さが際立つ絵本。

形をぼかし、恰好を自由自在に配置し、時にはこれでもかというくらいアップにする。そして、山場に向かって星になった子どもたちが手をつなぎ、星座を作る。

デフォルメされた花や子どもたちが集まり、星になって飛んでいる絵で終わる。

大から小への対比の良さも読者を惹きつける。

書評

たいようをつかまえろ

作：立川治樹

絵：くすはら順子

太陽をつかまえようと思い立ったのは、うみがめのアオとアカが、あまりにも美しい夕日を見たせいです。最初のページは、海に沈む夕日の絵の美しさ、壮大さで始まります。

「沈んでいくたいよう、ながめてるだけやなくて、つかまえへんか？」

「たいようをつかまえるやて？　そんなことできるんか？」

「しずんでいくとこわかってんやったら　つかまえにいったらええやんか」と。

立川治樹さんの文章は全文、関西弁の口語体です。愉快な物語を期待させます。

次のページは、夕日が沈むと海の世界が広がります。朱色と黄金色から深い青と水の色の世界にかわります。くすはら順子さんの絵の世界観は、太陽の日没は美しく、海の生物を可愛く力強く、壮大な自然と迫力を描き出しています。

「たいようをつかまえろ！」という壮大な計画は実現するのでしょうか。

アオとアカは、とうとう海底まで探しに来ます。ダイオウイカのダイちゃんの家があります。話を聞いて、大きなダイオウイカが太陽をつかまえようと探しますが、海底の暗黒の世界に太陽はいません。そこで、第２の計画、チョウチンアンコウが、100 匹で明るく光を出してくれます。太陽はいません。太陽を探す仲間たちは、伝言ゲームで知らせます。

海の仲間が勢ぞろいし、物語はクライマックスへ。しかし、太陽はのぼっています。海面では、クジラ君が大ジャンプをしてみますが、太陽に届きません。物語のドラマチックな展開が絵の迫力で見事に表現されています。

この『たいようをつかまえろ』は、日本児童文芸家**協会・絵本塾カレッジ共催「絵本テキストグランプリ」第一回大賞受賞作家の２作品目になります。**

因みに第一回大賞受賞作品は『ちょとつ』です。

書評；芦名丹佐（図書館司書）

2023 年 7 月 15 日

絵本テキスト創作塾事務局；発行